2016-2017
Rotary 週報
国際ロータリー第2720地区
大分1985ロータリークラブ

第26回　平成29年　2月　6日　No.1417

会　長　吉　良　昌　一
幹　事　穐　田　英一郎

例会日／毎週月曜日 12:30～
例会場／トキハ会館 4F
TEL 097-532-0611
FAX 097-532-8386

Email：oita1985rc@mist.ocn.ne.jp
ホームページ：www.oita1985rc.jp

会長スローガン

「誠心誠意」

2016－'17年度
国際ロータリーのテーマ
「人類に奉仕するロータリー」

人類に奉仕するロータリー

R　I　会　長	ジョン・ジャーム
RI第2720地区ガバナー	前　田　眞　実
大分第4グループガバナー補佐	工　藤　　隆

■　本日のプログラム（2月6日）

12:30	点　鐘	
	会　食	
	ロータリーソング	「奉仕の理想」
	ゲスト･ビジターの紹介	会　長　吉　良　昌　一
	会長の時間	会　長　吉　良　昌　一
	出席報告	出席担当　大久保　修　身
	幹事報告	幹　事　穐　田　英一郎
	委員会報告	「関係委員会」
	ニコニコタイム	高　野　　太
13:00	「メディカルアロマ」について	松本　亜希　様

＊ 今週のお祝い

在席記念日	小野三八男会員	（H2.1.29：27年）
	髙野　　太会員	（H28.1.6：1年）
結婚記念日	髙野　　太会員	（2月7日）
	吉良　昌一会員	（2月10日）

■　第25回例会の記録（1月30日）

全員協議会「クラブ運営資金について」
於：コンパルホール

・出席報告（1月30日）

会員総数	16　名	
1月 30日		
出席免除	2　名	
出席会員数	10　名	
出席率	66.67　%	
ゲスト	0　名	
ビジター	37　名	（サインのみ受付）
1月　16日		
修正出席率	75.00　%	

ロータリーソング　【奉仕の理想】

奉仕の理想に集いし友よ　めぐる歯車いや輝きて
御国に捧げん我等の業　永久に栄えよ
望むは世界の久遠の平和　我等のロータリー

会長の時間　（2月6日）　会　長　吉　良　昌　一

フーテンの寅

日本各地の美しい風景、文化を背景に描かれた映画。フーテンの寅こと車寅次郎こと渥美清さんが亡くなって20年。テキ屋稼業を生業とする車寅次郎が何かの拍子に故郷の葛飾柴又に戻ってきては、大騒動をおこす人情喜劇の映画です。毎回、旅先で出会った「マドンナ」に惚れつつも、失恋するか身を引くかして成就しない寅次郎の恋愛模様がなぜか人情を感じる。

年に２回公演、盆と正月。懐かしい日本の風土が。映画の最後にながれる各地のお正月風景、夏の各地のお祭り。日本人の心が。

今回は「フーテンの寅さん」から名言を私なりの解釈でご紹介します。

（第６作　純情編）
　わびしい独り旅の夜汽車の中のうたたねに
　ふと夢に見るのは　ふるさとのこと。
　お笑いくださいまし。

（第７作　奮闘編）
　月にむら雲
　花に風
　一寸先の己が運命
　わからないところに人生の哀しさがあります。

全国を独り渡り歩く寅さんは、新たな出会いと同じだけ孤独。それでもやっていけるのは、やっぱり家族と古里の存在。帰る家があるというのは本当に幸せであります。だから寅さんは好きなことばかりやっている。自分の人生を楽しくまた満喫している。

最後に私が思うのに、家族への感謝・恩は生きているうちに返せないというのも納得できます。でも上手にそれを家族に示せない寅さんもまたいじらしいのです。

成程、冬の次は　春ですか…　（第40作　寅次郎サラダ記念日）より

春の次は夏、お盆には寅さんに逢いに行きましょう。良き時代の日本人の心を写す鏡のような作品を。

〈卓話の時間〉 全員協議会「クラブ運営資金について」　コンパルホール（1月30日）

■来年度より会費と奉仕活動費を下記の通り修正します。

会　　費	130,000	→	150,000
奉仕活動費	48,000	→	60,000

ロータリーが誕生したころ　ロータリーの友　2月号

今月号の表紙は、いつもと違った雰囲気で驚いた方も多かったかもしれません。しかし、毎月、本欄をお読みくださっている新会員の皆さんは、そこに写っているのが誰なのか、すぐにお気づきになったことと思います。そうです。12 月号の本欄で紹介した、ロータリーの創始者ポール・ハリスです。

ではなぜ今月号の表紙がポール・ハリスなのかおわかりですか。それは 2 月 23 日がロータリーの創立記念日だからです。1905 年のこの日、ポール・ハリスは 3 人の仲間と会合を持ちました。その時の 4 人が、横組みの表紙を飾っているメンバーです。

左から、シルベスター・シール、ポール・ハリス、ハイラム・ショーレー、ガスターバス・ローアです。

ポール・ハリスは、シカゴでの生活は孤独であったと述べています。そして「ある晩、私は同業の友人に連れられて、郊外の彼の家を訪れました。夕食後、近所を散歩していると、友人は、店の前を通るごとに、店の主人の名を呼んで挨拶するのです。これを見ていて私は、ニューイングランドの私の村を思い出しました。そのとき浮かんだ考えは、どうにかしてこの大きなシカゴで、さまざまな職業からひとりずつ、政治や宗教に関係なく、お互いの意見をひろく許しあえるような人を選び出して、ひとつの親睦関係をつくれないものだろうか、ということでした。こういう親睦関係ができれば、必ずお互いに助け合うことになるはずです」と、著書『ロータリーへの私の道』に書いています。

その考えをしばらく一人で温め、後に前述の会合を持ちました。これが、後に 200 以上の国と地域に広がり、約 3 万 5,000 のクラブと 120 万人以上のクラブ会員を有するようになったロータリーの初めの一歩でした。

この会合は、シカゴのダウンタウン、ユニティ・ビル 711 号室、ローアの事務所で開かれました。残念ながら今、そのビルは残っていませんが、跡地前の歩道には、そのことを記した小さなプレートが埋め込まれています。また、現在、エバンストンにある国際ロータリー世界本部の 1 階にその部屋が再現されていて、見学することができます。

ポール・ハリスは同書に、ロータリーについて次のように書いています。「シカゴという大都会に集まった、この小さなグループの会員にとって、ロータリーは砂漠のオアシスのようなものでした。彼らの集会は、今日のほかのクラブの集会とは違って、もっと親密であり、はるかに友情がこもっていました。面倒な、意味のない制約は振りすてられ、もったいぶったつくろいは入口で断られます。会員たちはみんな少年に戻るわけです。私にとって、クラブの集会に出席することは、あの谷間の家に帰るのと同じことだったのです」

「あの谷間の家」というのは、彼が少年時代を過ごしたウォーリングフォードの祖父の家のことです。「砂漠のオアシス」「なつかしい故郷」、皆さんにとって、例会は、クラブは、そのような場所になっているのでしょうか。入会して間もない人は「とんでもない、緊張の連続です」とおっしゃるかもしれません。しかし、時間の経過とともに、少しずつ例会が居心地の良い、ほっとする時間に変わることを願っています。

「果報は寝て待て」と言いますが、ロータリーでは寝ているわけにはいきません。積極的に例会やその他のクラブ活動に参加して、先輩会員に積極的に話しかけてください。皆さまの行動が、ロータリーをオアシスにする鍵になるのです。